創立50周年を迎える日本交響楽振興財団

インタビュー

文化が国力をつくるという現実

作曲家・日本交響楽振興財団理事　三枝成彰（さえぐさ しげあき）

苦境の中で響きわたる歓喜

――新型コロナウイルス対策で「緊急事態宣言」が発出され、クラシック音楽の世界も苦境に立たされていますね。

三枝　２０２０年春から、私がプロデューサーとして関わっていたものも含め、コンサートが軒並み中止となり、私の事務所も収入が減少しました。これを機に時間のかかるオペラの作曲に日々いそしんでいます。しかし、苦しんでいるのは指揮者やソリスト、楽団員でしょう。演奏できないつらさに加えて、収入が途絶えていますからね。

――先生が毎年、プロデュースされている大みそか恒例のコンサート「ベートーヴェンは凄い！全交響曲連続演奏」は開催されました。

三枝　開催できて良かったです。２０２０年はベートーヴェン（１７７０－１８２７年）生誕２５０年でしたから、無事に行われ、一条の光を見出せました。この状況下、年の瀬に第九の「Freude」（歓喜）が響きわたったのは素晴らしいことでした。

国際標準の文化、誕生と発展

――なぜ、２００年以上も前の音楽に現代の日本人が酔いしれるのでしょうか。

三枝　クラシック音楽は、10世紀末に生まれたイタリアの修道士グイードが記譜法の原型を考案して発展します。楽譜に音楽が残せるようになり、聖歌など膨大な楽曲が蓄積されていきました。１３４７年、地中海から広がったペストによって欧州では３人に１人が亡くなり、その終息後、宗教が支配した封建的な中世も終わります。イタリアからルネサンスが始まると、フランスのジョスカン・デプレ（１４５０？～１５２１年）らの音楽家が世に出てきました。デプレの「千々の悲しみ」は、天正遣欧使節団の４人が１５９１年に豊臣秀吉の前で演奏したという記録も残されています。その後も欧州で音楽は発展します。西洋人が基本倍音列を発見してハーモニーをつくり出し、人々の感性を踏まえた時代精神を採り入れていったためです。その結果、国際標準の文化となる音楽が生まれ、２５０年前に生まれたベートーヴェンが芸術に昇華させました。モーツアル

トやベートーヴェンの時代まで音楽家は世襲でしたが、ロマン派以降は、音楽家の家系ではない人が大半です。

高みを目指す者を育てる意味

――日本でも、世襲的な色合いがとても薄い世界だと感じます。

三枝　多くの国で様々な人が高みに挑戦しています。日本では戦後、音楽教育が強化されました。かつて小学校の先生はオルガンが弾けないと就けませんでした。義務教育課程で音楽が正科になっているのは世界でも稀です。そうした環境が、世界的な指揮者である小澤征爾さんなどの音楽家を誕生させたわけです。１９７３年には日本交響楽振興財団が設立されました。小澤さんご自身も経団連に赴き働き掛けてできた団体です。企業が資金を出し合い、若手の音楽家に世界で活躍するチャンスを与え、各地の交響楽団が定期的に演奏会を開けるようになりました。

――小澤さんは、日本では人材育成にも尽力しています。

三枝　日本を代表する指揮者やソリスト、交響楽団を育て、世界の舞台で活躍させることは、国力強化に繋がります。世界には、経済力が伸びていても、世界のスタンダードには及ばない交響楽団しかない国もあります。それが国際政治のパワーバランスにも影響することに気付くべきでしょう。国力が文化をつくるのではなく、文化が国力をつくるのです。より重要なのは、演奏者だけでなく、聴く側にも教養が求められ、歴史を理解することが必要なのです。教養ある人間を育てる意味でも、クラシック音楽は重要なツールです。

ハイレベルの音楽文化は企業が支える

――日本の交響楽団のレベルはどうなのでしょうか。

三枝　ＮＨＫ交響楽団は世界の十指に入ると思います。レベルが高く、７、８番目でしょうか。日本には、素晴らしい演奏を日々気軽に聴ける環境があるということです。平時でも財政支援がないと成り立たないのが交響楽団です。大勢の団員や指揮者、ソリストの生活を支えるのは、もちろんお客様ですが、足らざる部分は企業に支援をお願いしたいです。

――先生は、オペラを何曲もつくられ、上演もされて、２０２０年に文化功労者にも選ばれています。

三枝　これまで私がオペラの作曲と上演にかけた金額は約64億円です。自分で出せたのは10億円で、作曲した「機動戦士ガンダム」などの楽曲の著作権印税を全てつぎ込んだものです。足らざる部分は経済界の皆さんに出していただきました。一人ひとりのお名前は挙げられませんが、多くの方々に支えていただき、今の私があるのです。心から感謝しております。

地域の活性化にクラシック音楽を

――日本には各地に交響楽団がありますが、地域で交響楽団が活動する意味はどのようなものでしょう。

三枝　ドイツには人口数万人の都市にも交響楽団があり、定期演奏会を開いています。レベルが高く、町の誇りです。だからチケットを買って聴きに行きます。そういう文化的土壌の上に日常生活があるのです。もちろんその町の企業も支援しています。

――クラシック音楽は、地域振興の柱となり得るのですね。

三枝　先日、河村たかし名古屋市長にお会いした際、「リニア中央新幹線ができると東京まで40分、みんな東京に吸い取られてしまいますよ。その前に手を打たないと」と申し上げました。東京には現在、交響楽団が10以上あります。優秀なアマチュアの交響

楽団も数多く活動しています。世界から著名な指揮者やソリストを招き、演奏のレベルはどんどん上がっています。演奏会を聴きにリニアで名古屋から東京に来て、聴いた後、日帰りで帰る、というような事態を想定して、名古屋から世界に打って出る指揮者、ソリスト、交響楽団を育てるべきです。

知られていないあまたの楽曲を楽しむ

――ずばりクラシック音楽の魅力とは、何でしょうか。

三枝　先ほど申し上げた倍音列の心地よさでしょう。それは、地球上の民族が共通して感じる自然の摂理です。西洋人が発見して理論的に体系化し築き上げたものです。クラシック音楽のベースになっています。現代音楽の世界では、オーストリアの作曲家シェーンベルク（1874－1951年）が110年ほど前に調性のない音楽を世に問い、それ以来、多くの作曲家が先鋭的なものを追い求めてきました。シェーンベルクの音楽は究極の改革でしたが、心地よさの点では古典派やロマン派にかないません。シェーンベルクの改革によって日の目を見なかった20世紀初頭の調性のある優れた楽曲はあまたあります。それらを作曲した音楽家に光を当てることも、現代の指揮者や交響楽団に求められます。多くの人に聴いてもらい、クラシック音楽の奥深さを知ってほしいと願っています。

クラシック音楽は、日本から興ったものではありません。音楽に限らず、今日における世界水準と呼ばれるものは、殆ど西洋人がつくったものです。私達がなぜキモノを着ずに洋服を着て生活するようになったのかを考えてみる必要があると思います。

日本と西洋の違いは、米文化と麦文化の違いです。お米は何年でも同じ土地から獲れますが、麦は畑を変え、常に技術革新をしなければ獲れません。その中で日本人は、文化においても先祖が残したものを大切に継承することを重んじ、逆に西洋人は常に新しさを求めるようになりました。歌舞伎や能は素晴らしい文化ですが、伝統芸能であり、西洋人が考える「芸術」とは違います。西洋人は、古きよきものを継承するより、たとえ大衆に受け入れられなくても、それまでになかった新しい切り口のあるものを「芸術」として評価するのです。これは、三千年前から変わっていない胡弓を今でも使っているアジア人の理解とは異なる考え方です。変えないといけないと思っている西洋人と、変えることをしないアジア人の精神性には、このような対立構造があるのです。それが正しいかどうかは別の話ですが。

個々の演奏家が優れていても、オーケストラにはまだこれといった団体がないという国もあります。世界の実情をみると、優れたオーケストラがあるかどうかは国の文化レベルの表れとも言えそうです。いろいろな国で優れたオーケストラが増えることを期待したいと思います。

――クラシック音楽の魅力を語っていただき、たくさんの発見がありました。ありがとうございました。

（4月27日、三枝氏が代表を務める東京・六本木のメイ・コーポレーションにてインタビュー）

三枝成彰氏略歴

1942年生まれ。作曲家。代表作にオペラ「忠臣蔵」「Jr.バタフライ」「KAMIKAZE -神風-」「狂おしき真夏の一日」、NHK大河ドラマ「太平記」「花の乱」。1988年に「二十四の瞳」「光る女」で日本アカデミー賞優秀音楽賞、1989年に「椿姫」「優駿」で同最優秀音楽賞を受賞。2007年に紫綬褒章、2017年に旭日小綬章を受章。2020年11月、文化功労者顕彰を受けた。